助詞・助動詞

— スロヴェニア語との対照から —

重盛千香子（リュブリャーナ大学）
chikako.bucar@guest.arnes.si

1. はじめに

言語が違えば、それぞれの言語における品詞分類も違う。特に日本語とスロヴェニア語のように、または日本語とヨーロッパの諸言語のように、体系や構造がかなり違う二言語間では、それぞれの品詞および単語の意味と形態を正しく理解しようとするとき、問題が生じることがある。

品詞の理解で身近な例を挙げれば、日本語教育の初級に出てくる「違う」は意味的にかなり形容詞に近いのだが、日本語での品詞は動詞で、それを形容詞として活用してしまうことが多く、これは日本語を外国語として学ぶ者の間だけではなく、日本人の間でもよく見られる。もう、「違くない」「違かった」は口語では間違いではないという考え方もある。

この小論では、日本語文法史の流れの中での助詞・助動詞の扱いを見直し、その意味機能や形態から整理する品詞論に関する問題を、日本語教育の場面で論じる場合を考える。メタ言語を使いながら、どのような説明や定義をすれば誤解や無駄がなく、妥当な理解に繋がるだろうか。

まず、国語学史における助詞・助動詞という用語と品詞分類を見る。次に、メタ言語使用の例として英語とスロヴェニア語の「助詞」にあたるものを見てみる。振り返って、現代日本語の助詞とはどんなものなのか、それに対して、文法用語として現在私たちの日本語教育でも使っているスロヴェニア語の *členek* (= particle [英]) がどのようなものを指すのかを見て、双方の違いから、日本語教育ではどんなことに気を付けていきたいかを述べる。

2. 国語文法

助詞と助動詞、この二つの品詞名には、助けるという字がついている。国語学史によると、本居学派以降の品詞概念である三文法（言、詞、辞）^{さんぶんぽう こと ことば てにをは}に倣って、明治初期にも体言、用言、助辞（落合・小中村 1890）としていたのだが、大槻文彦が、『言海』の「語法指南」（1889）で8品詞を立てた。名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接続詞、てにをは、感動詞の8分類である。すでに富樫廣蔭が江戸末期（1826）に、それまで「てにをは」と言われていた、いわゆる他の言葉を助けるものの中には、「動くも静れるもある」と述べ、つまり「助辞」を動辞と静辞に大別できると言い、落合・小中村も「助辞」を動助辞と静助辞に分けて考えた。古くから、これらの言葉は体言や用言（今で言う名詞や動詞・形容詞）の自立語に対して付属語であるという意識があり、何らかの語に付属してその機能を発揮するという意味で「助ける」という字がついていること、そして、辞（テニヲハ）を動と静に分けるというのも、品詞概念の三分法では一つに括られていたもののうち、一方は活用のあるもの、もう一方は活用しないものという形態的理由で二つに分けて考えるのだということは、容易に理解できることである（斉木・鷲尾 2012, 85~91）。実際に、以上の2種のうちの活用しないものを指すために「助

詞」という品詞用語を使い始めたのは山田孝雄の『日本文法論』（1902～08）以来、つまり20世紀に入ってからだだったようである。（斉木・鷲尾 2012, 105）

3. メタ言語での理解

例えば「助詞」の英語訳を見ると、どちらかというとその形態のほうに重きを置いて、助詞=particle としていようだ。言語の分野で使用する particle という語の意味は不変化詞、つまり語形変化のない（活用しない）単語で、形としても短い、または小さいものが多いため、日本語で外国語の文法を論じる場合には、英語その他印欧語のこの種の語を指して「小詞」とも呼ぶ。英語の particle の内訳を見ると、動詞の不定形を示す to、句動詞 (phrasal verbs) を作る up, over, for、間投詞の now, well など、また、否定を表す not などがある。これを日本語の助詞と比べると、活用しないという面では確かに同じだが、英語の particle の文中の位置は必ずしも一定ではなく、統語的に見て、まとまった一つの品詞と考えるのは難しいようだ。似たような状況が、スロヴェニア語にも見られる。

英語の particle にあたるスロヴェニア語の単語は členek であるが、この単語の第一の意味はいわゆる手足の関節という意味で、スロヴェニア語の辞書には2番目の意味として、物事をつなぐ部分、たとえばつながっている鎖の一つ一つの輪、または抽象的に、事件と事件をつなぐ出来事などのこと、とあり、そして3番目の意味として、言語学用語の členek を「意味的に独立せず、活用しない単語、文脈において強調を表したり文や語句の意味を部分的に変える語」と説明している (SSKJ²)。

現代スロヴェニア語のコンテキストでは、2014年に一般向けの本『スロヴェニア語の členek 辞典』が出版された。表紙には、členek の頭文字 Č とともに、昆虫の蜘蛛が描かれている。クモは足が長く、その関節が目立つので、この本の表紙として魅力的なデザインである。この本で、文法用語の členek (=つなぎことば?) をどのように説明しているか見ると、非自立語であって、すでに存在する内容を部分的に変える修飾語的働きがあるとし、その意味役割から、A. モダリティー機能を持つものと B. 接続の役目を担うものの二つに大別している (Žele 2014, 9～11)。以下に主な例を三語ずつ、例文と共に示す。

A. モダリティー機能

morda:

Zvečer se morda vidiva.

今晚お会いするかも知れません。

seveda:

Z njegovim mnenjem se seveda ni mogoče strinjati.

彼の考えにはもちろん賛成できません。

samo:

Zanj je pomembno samo delo.

彼にとって大切なのは仕事だけです。

B. 接続機能

čepprav:

Priden je, čepprav ne posebno nadarjen.

特に才能に恵まれてはいないが、勤勉だ。

namreč:

Midva, namreč žena in jaz, se nikoli ne pričkava.

私たち二人、つまり妻と私は決して仲たがいない。

torej:

Zmagali so v svoji skupini in bodo torej igrali v finalu.

自身のリーグで勝った、ということは (つまり)、決勝戦で戦うわけだ。

これらの例文の意味を訳してみると、日本語ではそれぞれ助詞、副詞、接続詞、モダリティーを含んだ文末表現などにあたる。

先ほど、英語の particle にあたる語の種類を見たが、スロヴェニア語では、さらにいろいろな意味を表すさまざまな語句が *členek* (日本語で意味的に最も近い訳としては「つなぎことば」と呼ばれているのに驚きを感じる。

さらにスロヴェニア語文法の品詞についての最近の研究を見る。Besedne vrste v slovenskem jeziku (=スロヴェニア語の品詞、Grošelj 2018) は、今までのスロヴェニア語文法における品詞論をまとめ、品詞のカテゴリーを3つの基準、すなわち、意味・形態・統語という優先順で10種に分類している。その10品詞とは、名詞、形容詞、動詞、副詞、間投詞、代名詞、数詞、前置詞、接続詞、*členek* (つなぎことば) である。これらの品詞を意味・形態・統語的基準によって表にまとめている部分では、最後に挙げている *členek* (つなぎことば) に関して、完全な内容語 (自立語) ではなく、伝達内容またはその構成部分と発話者との関係を表す文法的意味を担う語で、語形変化がなく、統語的には統一性がない、としている。(Grošelj 2018, 503)

また、*Členek v Slovenskem jezikoslovju in slovarju* (=スロヴェニア言語学・辞書における *členek*、Balažic Bulc 2018) では、*členek* の問題、つまり、この品詞をどのように規定するかは、いまだに解決していないとし、副詞との類似性や談話マーカとしての役割を示唆しつつも、将来のスロヴェニア語辞書の整備のためには従来の分類法や語感による定義ではなく、それぞれの語 (または語群) がどのような場面で使われるのかをコーパスも駆使して調査し、辞書の利用者にも親切で分かりやすい分類や定義が必要だ、としている。(Balažic Bulc 2018, 537~8)

スロヴェニアで日本語を教える場合を考えてみる。日本語教育の場面では、文法説明の時に単語の種類を示したり、その機能を説明したりするときに、現地言語やメタ言語を使うが、例えば英語の particle (スロヴェニア語では *členek*) という言葉の元々の意味が学習者にとってどんなものなのか、その元の意味に影響されて日本語の文法理解が妨げられていないか、と心配するのである。

4. 助詞

日本語の助詞は、まず、その形態 (短い語だということ) と、統語的位置 (後置詞であるということ) で一つに括られているようだが、その意味機能によって次の下分類がある。それは、1) 格助詞、2) 副助詞、3) 係助詞、4) 接続助詞、5) 終助詞、6) 間投助詞、7) 準体助詞、8) 並列助詞 である (小学館、青木)。

これらの日本語のさまざまな助詞の下分類のなかで、表現形式がスロヴェニア語では全く違うものがはじめに挙がっている。1) の格助詞表現である。周知のごとく、スラヴ語では名詞や形容詞に格変化があり、日本語の格助詞に当たる意味機能を担うのは、名詞や形容詞に追加される語ではなく、名詞 (または形容詞) 自体の語尾形態である。

Čokoladna torta je na mizi.

チョコレートケーキがテーブルの上にある。

Čokoladno torto sem pojedla.

チョコレートケーキを食べた。

日本語に見られる全ての助詞が一貫して付属語であるのに対し、スロヴェニア語でそれぞれの意味機能を担う品詞を探して対応を求めていくと、格表現だけが全く異なった手段で行われている。そして、その他のいわゆる *členek* (つなぎことば) と呼ばれるものは、単語として文中のどこかに存在し、意味的には日本語の助詞や助動詞のいろいろと同じように、副詞的に、または接続表現として、あるいはモダリティー的な意味を付加する役目を担っている。また、大雑把に言って、スロヴェニア語の *členek* (つなぎことば) は、文中に現れる位置が日本語の助詞・助動詞のように厳しく決まっていない。その意味で、「つなぎことば」という和訳は誤解のもとにもなる。

スロヴェニア語母語話者に日本語の説明をするときには、スロヴェニア語と比べたときに特に目立って形式が違う格表現について、強調して教える必要があるだろう。日本語の分類で格助詞というように、メタ言語のスロヴェニア語でも努めて *sklonski členek* (=格表現のつなぎことば)¹、または *sklonilo* (=格マーカ) という用語を使いたいと考える。また、助詞全般に関しては(スロヴェニア語のいわゆる *členek* と言われるものとは違い)、関連する名詞に対して日本語では必ず後置されることも強調して良いと思われる。²

5. 助動詞

ここまでは主に助詞について見てきたが、次に助動詞を見る。「助動詞」という用語は明治の初め頃から例が見られたらしいのだが、その頃は一品詞とは認められず、例えば中根 淑^{きよし}が「日本文典」(1877)の動詞の項で、「常に動詞の後に添ふて、以其の意味の足らざる所を助け成す者」を助動詞と言っているが、文末に使われる「か」「や」「かな」など、現在(終)助詞とされているものまでを含めていた。先にも述べたように、一品詞としての助動詞は、大槻文彦が『言海』で1889年ごろ、てにをは(いわゆる今の助詞)とは別に品詞としてたてたのが初めのようなのである。しかし、少し後^{のち}に「助詞」という用語を使い始めた山田孝雄は、「助動詞」という品詞を立てることに反対で、これを用言の「副語尾」としていた。(齊木・鷲尾 2012, 88~90)

助動詞として認定される語は学説によって異なるそうだが(小学館、青木)、現代日本語(口語)で助動詞としてまとめられているものには、その意味から、受身、可能、使役、打消、推量・意志(う・よう)、希望、過去・完了、丁寧(マス・デス)、様態、伝聞、推定(らしい)、比況(ようだ)、断定(だ)などがあり、英語、スロヴェニア語、その他の印欧語でそれぞれに対応する表現形式はさまざまである。

受身や使役はヴォイスのカテゴリーとして捉えられ、名詞句の入れ替えと動詞の形態で表現される。「タ・ダ」は過去・完了など時制やアスペクトに対応し、意志、伝聞、比況などは、スロヴェニア語の場合は動詞に副詞や接続詞を添える表現に対応し、これらの語は、上の3節(メタ言語での理解)に紹介した本(Žele 2014)の *členek* のリストにも挙げられている。ここにいくつか例を示すが、どれもムードをあらわす *členek* とされている。

¹ *sklon*=格 [名] →*sklonski* 格の [形]

² つい最近刊行された和独大辞典(Stalph et al. 2009-2022, Vol. 1, 20)では、いわゆる「助詞」のドイツ語品詞名に *postp.* (Postposition=後置詞)を採用している。

意図 naj

Naj ti povem, kako se je to zgodilo. どうしてそうなったか、君に話そう。

伝聞 baje

Baje so zelo bogati. (彼らは) ずいぶん金持ちらしい。

比況・推定 domnevno

Otroci domnevno vidi jo najprej rdečo barvo. 子供はまず赤色が見えるようだ。

日本語の助詞（もちろん、格助詞を除いた副助詞以下の下分類）に対応すると思っていたスロヴェニア語の品詞 členek（つなぎことば?）には、日本語の助動詞に対応する表現も多く含まれているのである。江戸から明治初期にかけて、「テニヲハ」または「助辞」と呼ばれていた、体言でも用言でもない語群を日本語文法では「助ける」という字とその意味を共通に、助詞と助動詞という二つの品詞にしてきたが、「助辞」または「辞」と一つに括られていた時のこれらの言葉が、今のスロヴェニア語文法の広義のつなぎことば členek に相当するのかもしれない。

6. おわりに

初・中級の日本語を学部で教え、また修士課程で古文や言語学を教えていると、このような品詞分類の問題やメタ言語による文法説明などに関係することを考えるようになる。今後も、日・ス両言語の言語学関係、また印欧諸言語圏で日本語やその翻訳に関わっている研究者の方々の考え方に注意を払っていきたい。

主要文献

齋木美知世・鷺尾龍一 2012 『日本文法の系譜学—国語学史と言語学史の接点』 開拓社

小学館 ジャパンナレッジ Lib 日本大百科全書（ニッポニカ） <<https://japanknowledge-com.nukweb.nuk.uni-lj.si/library/>>（助詞、助動詞とも青木伶子）2022.12. 22. アクセス

Balažic Bulc, Tatjana (2018) Členek v slovenskem jezikoslovju in slovarju, *Slovar sodobne slovenščine: problemi in rešitve*. pp. 524-538, Ljubljana ZZFF.

Grošelj, Robert (2018) Besedne vrste v slovenskem jeziku, *Slovar sodobne slovenščine: problemi in rešitve*. pp. 498-513, Ljubljana ZZFF.

SSKJ² (*Slovar slovenskega knjižnega jezika* = スロヴェニア標準語辞典、2014) FRAN <<https://fran.si/>> 2022.12. 22. アクセス

Stalph J. et al. (2009–2022, Vol. 1, 20). 4. Wortarten, *Großes japanisch-deutsches Wörterbuch* 和独大辞典 München: IUDICIUM Verlag.

Žele, Andreja 2014 *Slovar slovenskih členkov*. ZRC SAZU, Ljubljana.